



浄土宗回向文和祖堂會

下

特
八波五
1811
3-3



波 5
號 1811
卷 3-3

本宗



浄土宗回文和訓圖會卷之下

浪華 好花堂野亭著

元祖大師一教起請略解

これ元祖圓光大師御述作の二教起請と中上の巻小述が如上人
御往生の二日以前化女来て望む中せしより大師御病牀に於て即
座小御直筆小書と与りしと法弟勢觀房源智窺ひ及その其身も
上人願ひしより再び御毫と深きせりし法語なり其文短く簡
易小く婦女童見も解し易た仮名文なりとひと由文意ハ深長小
て一朝一夕小説尽し難く真浄土門志起行の眞義あれむ最
大切の御法文なり抑一枚起請と中ハ數帛あり唯一枚小念佛の

大谷
文庫

極意を録一のひも一枚起緒と中せり。枚字書小箇也と有て
物と等る一一枚二枚との又更を等る一一條二條とのと唐土にてハ
墨筆の類あるひと桃李の類を等る一一枚二枚とのと日本にてハ
帛板の類の平た物を敷る時むる一枚二枚との其外ハ箇二箇と
りて○起緒とハ唐土にて誓約又と盟あざりて更ふて言更ふれ
違ふとぬるとして證據小書と起緒とのなり。吾朝の起緒文の推輿
と神代の卷小伊弉諾尊と伊弉冉尊と誓ひの更あり是を
誓約との即ち起緒の更なり。又曰書小天照皇太神と素戔嗚鳥
尊との誓約あり。人皇小つりて湯起緒といふ更あり。應神天皇の
御宇小武内宿禰筑紫の守護職を奉りて九州と預り領せり。

武内の舎弟甘美内宿禰舎兄の官職の高たを如と應神天皇小後言
一其が兄武内宿禰三韓の者と内通。日本と攻亡さんと巧いと滅
や小奏せり。天皇逆鱗や。筑紫征兵を下り武内の居所と攻
させのひ武内の臣下壹岐直真根子と一人主の身がりと成り戦
死。武内ハ遁て帝城へ上り。天皇へ身小犯せり眾ありと殺た松分
即ち甘美内宿禰を召出され兄武内と對決させのひ双方論争ひて更
小真偽分明あり。神祇を勧請あり。其前小鼎を居湯と
焚沸せ。兩人ハ熱湯の中へ手とさし入させ湯と探せのひ手の爛る者と真
と。手の爛る者と偽と定る。小依て武内先鼎の中へ手とさし入て湯
を探る。手すくゆ爛る。次小甘美内鼎の中へ手とさし入る。小忽ち

手の肉爛蕩々る由甘美内分絶奏を身更露顯し武内八寛の罪と雪
 ると是湯起結の権子なり又元恭天皇の御宇小真偽を繪し争
 者ありて決せざりしを神前中芥と焼て争ふ者小握せて真偽を
 定のし更あを是火起結の濫觴なり物とも起結文書いふも後
 代の更あて文治年中土佐房正俊義経不審と受七枚の起結文を
 書しとあれ源平時代より此更有と見えたり又永久の頃筑紫安樂
 寺の別當安能僧都平家と同意し源家を調伏するより其後更あ
 小依鎌倉殿より弘明せり安能僧都身小覚あれしと陳謝し起結
 文を呈せとあを然も右等身小偽りあれ更と天地神明小誓言で陳
 謝の證據小せし書ふ源空上人の御遺紙の御書と其意はトク

是念佛信心の衆生の為
 小浄土門の安心起行の極意と
 示且と自宗他宗の中左や右
 と邪義を立る徒の横弁と未
 代で防だむらん為小書遺し
 のい金玉の法文なれ念佛の
 行者尊び重し朝小拜續し
 夕小拜誦して元祖大師の法息
 を骨小彫磨小銘し日課念佛
 の勤昼夜懈怠せざる者



土佐正俊
 起請

一枚起請

一名吉水遺誓

まろく我朝のちつしは智者多し
沙汰しやさるゝ観念は念ふも何のび

○まろくといは唐の字と書目。是唐の代ハ日本と通信する更取
て多く。緒の物と贈来る更繁きより更諸未といを略してわらうこと
和刻せたり。○吾朝ハ日本の更を以震且を唐の代ハ唐朝と云
明の代ハ明朝といふ如。朝ハ字書ハ君ハ親る総称也とあり。又朝を
聚るとも刻を惣とハ禁裡ハ公卿の早朝ハ忝肉ハ聚ると以て朝と
と言做し。禁裏を天朝とハ朝廷とも云り。それより日本の更を吾朝と云

吾國といふ如し。○まろくの智者達ハ和漢西朝とも博学多聞
ありて。内ハ三藏ハ通ド外ハ五明ハ達せし僧をり。三藏とハ三
藏とて一切諸經ハ通ずる然し。二ハ律藏とて諸の戒律を持し。三
ハ論藏とて経論の奥儀を究め。他人を屈伏させ。躬の智と増を
以以上三ツを兼備し。僧と三藏と称せり。次ハ五明とハ。一曰聲明
是ハ万の文字の音刻をとり。并知何の音何の物も。是ハ此字彼
其字と悉く引當て。文字の音と刻とを知をり。二曰巧明とハ。伎
術とて万の伎琴瑟琵琶箏篳篥篳篥篳篥篳篥篳篥篳篥篳篥篳篥篳篥
と。三曰醫方明。是ハ医業治療の道ハ達し。如何なる難病業
病も治不治を能弁知をり。四曰因明。是ハ物の邪正真偽と

与く并(虚)実(考)知(を)り。五(曰)符(印)明(是)ハ所(謂)獲(符)と
 緒(の)神(咒)を(書)て(諸)人(小)者(ある)ハ吞(せ)て(瘡)疾(疫)癘(を)治(す)る
 門(戸)亦(貼)せ(く)凶(更)災(難)と(除)く(法)を(會)得(せ)り。又(右)三(藏)五(明)小(通)
 達(せ)し(僧)と(知)識(も)智(者)と(も)以(て)心(を)と(ろ)く(の)智(者)達(と)書(ゆ)ひ(て)
 ○沙(汰)一(や)さ(ろ)と(ハ)沙(汰)ハ(事)の(善)惡(を)擇(分)と(り)り。沙(汰)ハ(と)ろ(ふ)又(ち)
 い(は)と(と)刻(汰)ハ(淘)と(刻)て。喻(を)砂(と)石(尾)と(成)汰(分)る(と)く。邪(と)正(と)を
 分(け)る(成)沙(汰)と(り)なり。緒(の)智(者)達(が)緒(經)小(就)て(念)佛(の)念
 の(正)の(意)味(を)と(ろ)く(なり)と。評(論)と(る)成(沙)汰(一)や(さ)ろ(と)曰(ひ)あり
 ○觀(念)の(念)も(あ)ら(ざ)と(觀)ハ(見)と(も)聞(と)も(刻)と(も)眼(と)て(見)耳(と)
 以(て)心(を)ハ(あ)ら(ざ)と(心)眼(と)て(心)の(裡)に(て)思(量)見(聞)と(觀)す(と)り(觀)音

と(い)ふ(由)也(且)と(觀)と(い)ふ(字)あ(ら)ず。是(心)を(以)て(聞)る(なり)。世(と)觀(する)と(い)ふ(由)
 眼(を)閉(て)心(の中)の(世)の(不)定(更)思(量)る(なり)。念(ハ)想(と)刻(人)二(の)心(と)書(て)
 念(の)字(と)す。故(ハ)不(断)思(て)忘(る)成(念)と(ハ)智(と)。觀(念)と(る)と(ハ)心(中)の
 世(の)無(常)更(を)念(觀)更(を)り(あり)。依(て)觀(念)の(念)も(佛)と(仰)れ(る)

又(學)問(を)して(念)の(あ)ら(ざ)成(悟)て(佛)も(あ)ら(び)

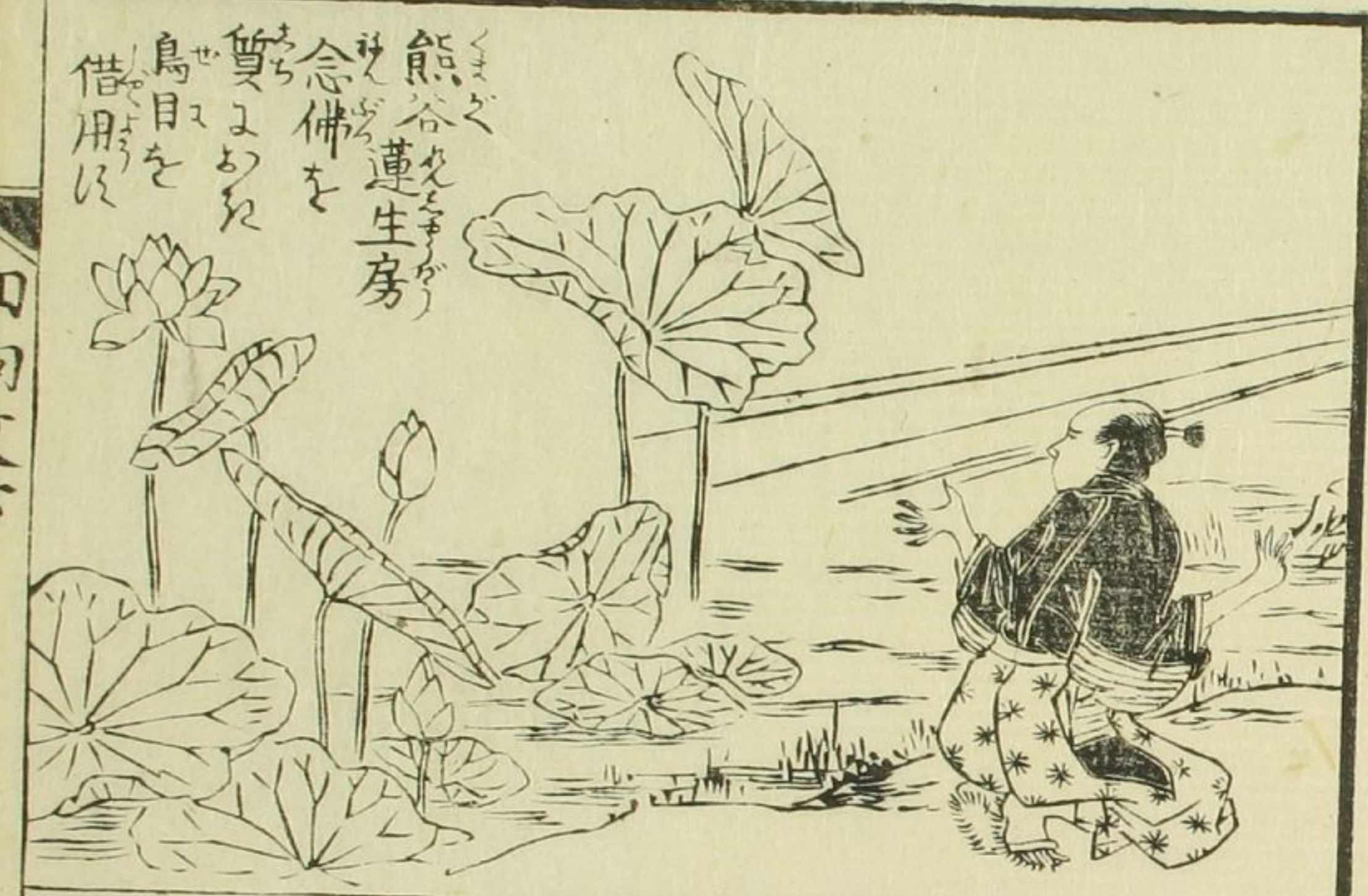
○又(ハ)字(書)小(郵)重(之)辞(也)と(有)て(前)の(字)更(と)り(を)又(と)云(あ)ら(び)を
 又(滿)と(て)我(を)滿(て)物(を)更(て)云(と)れ(る)又(の)字(を)置(たり)る。茲(の)如(き)觀
 念(の)念(も)あ(ら)ず(と)い(ひ)て。又(學)問(を)して(義)を(滿)て(又)の(字)を(置)か(ら)ぬ
 ○學(問)と(ハ)書(小)為(學)以(難)問(為)先(故)學(必)兼(之)以(問)と(有)

されを書物を学ばし問更が肝心なり。儒書佛書其れ何の書乎て
 も我合点のちぬ更ハ一々師を問は上達一々。故小先問とらひ學問
 と熟字より。僧の經論を學びて他の僧と回答するも以難問為先の
 義なり。されが僧法師の佛書を學び合点のちぬ更ハ師匠兄弟
 子あるハ他の博學なる人小問究念佛とハ如此の意なりと心小悟く
 中念佛をもちと曰ひたり。學問をて念の意と悟て中念佛を
 自力の念佛とて。聖道門の人の中念佛をて他力本願の佛の御意ハ
 協ど浄土門の口称念佛ハ學才ある人も一文不知の人も只心小助めと
 念。只南無阿弥陀佛と称れ。極樂往生疑たりとの御示を
 少も自力を用ひと佛の本願棄て稱と他力本願の念佛とハ中なり。或

人難して曰此段聊不審ある。學問をて念佛の功德ある。心
 小悟て稱る念佛を難有とハある。喻ハ珊瑚珠を鷓鴣毒
 を知と能ある。我知て腰小提沈香を不浄と除く能有と知て懐
 中ハ所持する。身の毒ある。然ハ珊瑚珠を身小帶と。鷓鴣
 毒を毒と能有と。我不知を脯玉を提。小異ある。沈香懐中
 しても不浄と除く徳をある。木屑を所持する。小等。一々
 念佛との。其功德をある。唯只の。稱る。ハ極樂往
 生。覺束ある。と。各て曰。所。應。心。小。疑。を。懷。人。余。曰。源。空。十。八。句。
 眞実の。觀。念。悟。道。の。念。佛。と。本。意。と。思。は。れ。れ。思。知。各。目



の輩小せあく佛縁と結むまけんぬ
 狸た念佛浅た安宅を勧められり
 是仮の方便にて。極樂往生の正義
 あつてひて愚昧の男女元祖大師
 の脚心疑わしめられん元祖上人
 を傳はるひて深く教たむ。我存生
 の内さ己小する邪義を言觸し
 て衆人の疑惑を引出と徒あつ
 増て我滅後小如何なる邪説
 を言出まけん測がごとしと思召て此



熊谷蓮生房
 念佛を
 鳥目を
 借用に

一枚起結の首お観念の念佛学
 解の念佛ハ浄土宗の本意小わ
 ざる上且諦小述もして諸人の疑ひ
 を解むへと。それ口称念佛の奇特
 昔熊谷蓮生房或商賈の許へ
 往我入用の更あれを鳥目十貫文
 借れんと頼る小利強た男
 にて安れ御更ふ。何れも貨物を
 給てハ鳥目を借進せごとしと
 辞れ蓮生房が曰我貨物と為

田向波下

身に物なり。然も貨物なく。叶むを我十声の念佛を貨物と
を命と云々。主頭を九脚十念を難有い。と。声ををまて
形なく。貨物小なり。いと。難。蓮生房推之。否
我念佛。形有。能。迎。庭前。の池。向。ひ。掌。と。合。し。高。声。小
念佛。と。称。多。れ。を。不。思。議。か。る。ふ。一。声。念。佛。と。れ。を。分。心。然。と。て。池
中。一。茎。の。白。蓮。花。生。じ。二。声。念。佛。す。れ。を。二。茎。と。成。十。声。小。十。茎。の
白。蓮。生。じ。花。の。色。鮮。小。葉。の。色。緑。濃。小。て。さ。も。涼。げ。ぶ。ん。え
る。小。と。王。公。羽。を。り。ち。家。内。の。男。女。此。奇。特。を。日。々。奇。異。の。想
を。為。さ。る。い。ち。皆。我。を。忘。て。合。掌。称。名。し。感。涙。小。袖。を。ぞ。沾。り。る
是。小。依。て。主。公。羽。ハ。十。貫。文。の。錢。を。取。出。て。蓮。生。房。小。借。与。へ。る。と。ぞ

然谷入道、すて佛学小凝一人あがれ。元祖大師の御示と
一箇小守。昼夜不乱。口称念佛。決定往生。小心を定。静も疑
心なれ。奇特を顕せり。念仏と信ぜん。人々少。自らの
知。目。惠。護。明。を。用。ひ。て。一。向。小。念。佛。ま。せ。じ。臨。終。小。必。す。阿。弥。陀
如。來。が。極。樂。引。接。り。と。疑。ひ。なく。安心。を。寢。り。お。起。る。念。佛。を
称。ぶ。れ。更。かり。抑。弥。陀。本。願。の。念。佛。ハ。超。勝。特。妙。の。法。と。て。十。方
緒。佛。も。唯。威。德。神。力。不。可。思。議。功。德。と。む。る。讚。め。ひ。も。何。も。思
量。し。が。し。と。や。是。極。位。の。菩。薩。も。弥。陀。智。願。の。廣。大。无。辺。なる
更。之。測。知。も。一。更。能。ざ。ん。ハ。又。一。人。問。て。曰。元。祖。大。師。久。前。小。傳。教。大
師。弘。法。大。師。と。も。め。其。余。の。名。僧。ま。く。世。小。出。り。各。二。宗。と。因。り。ん。時。の。天。子

御崇敬ましく。巍くも大伽藍を御建立あり。更敷あり。右
竿の名僧も。小唱をむる。念佛にて極樂往生のたゞる。更は知れざ
し。小や。甚だ不穿鑿の至あり。答て曰。さる。如く天台真言佛心
其他の宗旨の同基の知識念佛の功力廣大なる。更を知ざる。小ハ
れども。佛教を甚だむつ。限を廣く大なる。法も盡く。諸が
故小緒宗の祖師船了解する所等り。且其時代の人の機小應
いと宗法をまらる。所謂天台宗。如來真実の所説平等大
會の悟道を開。天台止觀の宗。限ると云。真言宗。小ハ阿字觀胎
金灌頂の秘密即身成佛の妙法。唯我宗の。と云。禪家。小ハ佛
教の真儀。ハ教外別傳。不立文字の法。して一切諸經。ハ推の方便。ハ直

指人身見性成佛。を佛法の真面目。と云。其餘法相三論以下の諸
宗。とも各其見解の品異なり。譬を水。小ハ見有か。天人。水と瑠璃
と見魚。水と舎と見。餓鬼。水を火と見。人間。水と水。日見。如。各
境界。小ハ隨。小ハ見所。差る。之。燕。日出。を朝と見。馬。ハ日。入。を朝と
見。鼻。昼を夜と見。類。ハ皆其姓。小ハ。見所。ハ。如。況。廣大
深理の佛教。小ハ。於。や。圓光大師。由。未代の人の。機。小ハ。合。分。法。を見
出。し。む。ん。も。御幼稚の昔より。四十五。の御年。まで。一切経。を。繰。返。し。と
聞。し。更。五。度。其。外。諸。名。師。の。選。述。の。書籍。ハ。幾。万。卷。を。讀。も
量。知。能。く。も。終。小。專。修。念佛の易行の當宗。と。用。し。更。一。朝。一。夕。の
脚。旁。心。あり。ん。や。竺。を。庸。愚。の。輩。免。や。角。と。議。論。を。為。ハ。燕。雀。の

身とて大鵬の動止を評すが如く齒牙ふるふ足ふるも
唯往生極楽乃ち終ふ南無阿彌陀佛とて
うがひあり往生とて終とておとひあるをさるや
おろりきあり終る油作らばと

此一段も一枚起結の眼目にて浄土門肝要の脚文章あり。此前後
の御示し只此一段の為なり。前の段の觀念の念あり。字向を
と念の意を覺て中念佛も遊すと曰ひ也。此段の口稱念佛にて
決定往生する事をあらうと云ふ也。此次の三心四修も此内小なり
又其次の智者の舉動をせざると曰ひ也。皆此段小を竟るといふ

よ〜〜味よがた脚文章あり。○唯二途よとの意なり。世界八十
方浄土とて東西南北天地四隅とも浄土あり。一途小西方極樂
浄土へ往生する事を浄土宗の宗旨あり。西方阿彌陀如来乃浄
土也。彼國へ往生する人皆无量壽とて死るといふ事なく。常盤
快樂國あり。と云ふ也。羊の老るるもた。苦といふ事なく。常盤
快樂國あり。を以て極樂浄土と云ふ。極樂國ハ七宝百宝无量の宝とて。莊
嚴とてあれ。嚴飾言ハ方なる宝國なり。就中壽成宝也。す
るよ心地觀經小説云。至彼經小曰。衆寶之中命寶為最
若存其命是無價寶とあり。され念佛と不斷唱極樂へ
往生して無量壽の身とあり。是れ小優る宝なる也。唐土ハ

仙術とて不老不死の術有とぞ彼國の人小長壽と望て右の仙術を
 学入昔より多々れども其修行甚難く中々学び極一人も万人か入
 希なり。邂逅仙術と学得一人有とらふも猶輪廻と免れず更不能
 是形神とのひく形神不執著する由かり寒山の詩小。饒汝得
 仙人恰似守屍鬼と賦せり此詩の意ハ汝たゞ仙術と学て仙
 人とかり長壽とるとも恰ど死の守とする陰鬼の如ふ者トヤと云こと
 かり。されば仙術成遂所が何の益ゆかり。増て仙術を得るとは交易
 更ふあふ成就せぬ勝かり昔漢の武帝とら王六天子の富貴飲
 樂小耽り方望長生不老の仙術を得と。五百年由千年由長生身の
 悞樂と極んと五利文成との二人の道士を仙人の棲とら蓬萊山の

漢武帝
 西王母
 不老不死の
 仙法を求む



遣して不老不死の仙丹を求む。又西王母との仙女の教を任せ。高二丈の銅の柱を建。其頂上は仙客の宮を捧て居る。金人を造り。天より降る露を承せ。銅柱の根は露の湛る盤を設け。是を承露盤と号す。其滴は露を玉の屑に煉。和是を服とせん。數百歳の壽命を保とて。不断是を服用し。功驗も又え。夜小七十二の崩脚のの。長安の都の西北なる岳に茂陵あり。陵と築た。葬り進せと名。故に或人の待小。若説神仙求便得。茂陵何事在。人間と排す。されば仙術は帝王の力も及む。然を極樂浄土の无量壽は。稱念佛の功力にて得る。唯心小助。南无阿弥陀佛と稱念せ。○申八呻と通して吟詠

の声也とありて。小續洞を甲といひ。吾朝の風俗は。言ふ申を。中と入。偕念佛。小四種の往生不定といふ。夏あり。○第一は假名念佛。往生不定とて。念佛と稱といふ。只人前むろの名。夏の後念佛。内心の緒の雜行を。思ひ後生を。信心は更なる。人國を念佛者の中。小いれども。眞実なれば。念佛も往生せん。不定なり。○第二は自力念佛。往生不定とて。弥陀の本願を信せ。自の意と。念ふ。念佛の念。中身の度。佛と名。我智を以て。押推し。悟り。己身の弥陀。唯心の浄土と言ふ。我身の外。小弥陀といふ。佛ゆかり。我心を離れて。浄土といふ國也。唯己の身が。弥陀我心が。浄土なり。と。生物知小。悟りて念佛と。中人。人自。小悟切。と。す。されど。却て。内心の煩悩。執著。絶ぬ故

往生不定なり。○第三小悪見念佛往生不定とて。弥陀の本願を
悪くせり。十悪五逆の罪人の口南无阿弥色佛と唱れど。何れも重
死罪科も消て極樂往生すとあれど。親小背れ。至不逆ひ借し。銭
金と返す。人の物と偷んて。念佛させ。罪消る。仕度させぬ。損
小と悪い所。目を付て念佛とや。人往生不定なり。○第四小慢心
念佛往生不定とて。我程の念佛者。有。唯其も信心が足ぬ。被
一向安心が定まらぬ。言。我をもと。自濟して。他人を獲り。弘念仏
者。往生不定なり。世の念佛者。右の四種の往生不定の人。何れも
慎むが。更なり。されど念佛をや。右四種の中へ入る。心かけ。唯
眼目と。子。眞実信心。念佛とや。被れたり。○疑なくと。疑は是

非のニッ迷を。つかり。但し。臨終の三疑とて。臨終小三の疑ひ起る者。
○第一小命終んとする時。臨心中。小我の信心未だ浅し。念佛とや
る。ゆよ。此三年あれど。恐る。極樂往生。覚束なく。疑たり。
○第二小我の多年。慳貪邪見。人小物と施し。更なり。○第三小
銭金や衣服。綱度。小念が遺を。往生させ。いと疑たり。○第三小
我此年来。夜昼とも念佛。やせども。今臨終。小佛菩薩。未降有
て。極樂へ引接。更なり。右三の疑なり。以上三の疑起。と。往生
の障となり。正念乱る。成佛する。更能む。臨終。小限を。平生。小
ゆ。右三の疑ひ。を生。易れ。ゆ。右等の疑念。起すべ
く。経文。小念阿弥色佛一聲。滅八十億劫生死重罪。

細詢散

と鏡のひ一聲小ても真実小念佛とせむ八十億劫とて限なく久
た間の生死の重た罪も滅るとあれむ。他更と思む一心不乱小念
佛さくせむ。極樂往生疑ひなくと安心と定む。〇又臨
終の四圍とて四の圍あり。〇一ハ多年信心堅固小念佛の行を勤
まじも。前生の業未だて臨終小病苦強く身を悩むと更あり。智有入
と。是ハ此身の業なり。如此苦を受る小付ても。来世の苦患と助の南
无阿弥陀佛と念佛とれむ。自然病苦も退た安樂小命終すれむ。
愚癡なる人より婦人より是迄起り居り念佛とせむ其功
徳もなく。臨終小此中苦悩をんせむ。佛の本願も頼みあらず
奔願経の法談小念佛さくせむ。臨終小諸の苦痛ハ無とす。和尙

の初。虚誕なりと佛を恨み。談義僧と糾り心顛倒するもあらず。
臨終小心乱る時ハ是れ念の念佛の功力消失て往生の因となり
却て悪趣へ落たり。〇二ハ平生ハ後生が大事なり。早う御迎下され
りと人小ハ心内心中百年中二百年も長生せん。茶とす言生
類と殺と喰高金を抛て長命の業と水も瀕驚死病を患ひ
てハ宮寺へ祈願し。瓶ありし。山伏小加持符符と頼て無益小金
銀を掠取て終小死滅の期小及て。平生の後生大更ハ何所へや
投りて。死格小心惑乱する人あり。是ハ大往生の因あり。〇二ハ平生ハ
戒を持ち魚鳥五辛と禁珠數ハ誦と向中放さず。五千の一万の
日課と繰か。貸銀の利足借家の宿賃ハ苛まらず。取らざる。万更限

の病と患ふ年来新し魚鳥とのふ及ぶ種々汚穢も業食と
とも驗なく末期の際お及びては金銀の念を残り毒毒お心惹れ
死を悲と戒行と失念するハ往生の因なり○四の臨終おびと人
の生存命と羨み人お貸る財宝を悟る或他國不在子孫お逢ね
悲と又と配割せし医師を怨む一向生と承んて心錯乱するハ往生
の因なりとも妻子珍宝も命終を何おせん他カ本願の佛の誓い
棄てて身ハ臨終の期万変を放下唯一心お称名して弥陀の来降
を待無比の寶具國へ往生とて依て疑わくや外お別の子細いすと
のこすい

但し三心四修とや事乃のたハ皆安定し

南無阿弥陀仏して往生するごとく思内お籠い也

三心とハ觀經の○一ニ至誠心ニ深心三ニ回向發願心以上と三心と云
は經の曰貝足三心者必生彼國これ至誠心とハ字書小至眞
也誠ハ實也と有これと至誠ハ眞實との意して往生と欣入爲
り街る心なく眞實お念佛す等と成り○二ニ深心とハ深ハ信也
と有む深心ハ信心とは意なり説文ハ信ハ誠心也と有て疑いの心
おれと信といふは昔漢の李廣との武勇の人野徑と馬上お
通るお前路お射る虎あり饒勇の李廣此も怕ど持る弓
矢と番て發矢と射る過る虎の正中お寛深お射付る依て馬



李廣が
一心
岩に
箭立

を強寄てよく見を虎小似る岩
かゝる矢の羽袋迫りまきあり
李廣異と馬と戻して再び弓矢を
つゝ兵と射ふ此度ハ鏃確々飛々
る是先小射る時ハ途小虎也
と思信と射る時其矢岩小深
く入り後小射る時ハ岩かき
と知る岩小矢の立る理ハ
と心小疑念を生始の信矢々
射る矢あれを鏃碎てまきあり

され信と不信との差如此也ハ
信心決定して念佛する者ハ彼國小
生ると鏡もひかる然も世小思
直とも信の心ハ有とも歎正直の
信ハ益なる中華小尾生として生質
歎正直なる者あり或女と契と結
ひ侍て往るガ川橋有岸小
女ハ只妻此辺小知音あれ其人の
屋ハ往今夜の宿を借て君と迎小
来りの宿とこれ此橋柱の根小



尾生が
愚直
水は
濁る

待ちへ必他所へ往まふと云て去るれを尾生六女の言を守り搗柱
の根ふまき待ちぬる倉平小洪水きくろて尾生が停ま一足むとせ
水つれれども女が此所にて待よと云一糸を途小守り漸く水深なり
も猶去と己小水胸まで未れども搗柱を抱て尚其所と去
す遂小洪水の爲小溺死する是愚直の信おて却て身を亡
末代を耻を遺せり故お信も妻お倚がなかり○三回向發
願心と大体回向と發願とは何れ更あが少の差等あり回向を
中の巻小迷ぐる娑婆の輪回の心を叩て佛の本願小向を約めて
回向といへと發願と願と發と訓字おて娑婆の迷る心と搏し叩
佛の本願小向て而後小又極樂往生させると願と發と義おれ

心大同小異ありと知命し諸四修と六○一曰長時修是ハ一ハ
本願念佛をよめ初てより未信心堅固ふして臨終の際おて
中絶なく勤行すると云あり元て何妻小志しても始ハ心進めと
ま中絶のする者あり然れを始より凝勤し苦心画餅と成
何の途おた昔孟子入学して租書日経を學々るる西三事お
おびく退屈を生じ我母の舎へ歸るを折節子母を布と
織居て我子の歸し我見其學得し書物の多寡分を問ふお
妻りふれを孟母甚し不與織るける布と鉄おて断剪我お
示して曰此布今僅小二三尺おて断れ何の用中も不足你が學問
お又此些少の書籍と學子の中て止時ハ今日おて乃學業

水の泡と消て其途なりと叱りたるを孟子大の愧恐と再師の
塾へ往丹絨を凝して受同し遂小鴻儒と成るとや是即ち長時
修とは意なりされ念佛の行者中絶なく勤むるなり○二曰
恭敬修是ハ三密を恭敬て修行するあり恭敬の二字ハとも敬と
刻る佛と崇む敬を信し届む聊ても不敬なる心あれば佛の良
愍小池なり依て佛前小向とて其身を浄め三禮九拜と念佛と
なり是を恭敬修とす○三曰無間修是ハ回ハ交るとも隔とも
刻る緒の雜行と回る更なり貪瞋癡の三毒信心を回る更も無
一向心小念佛の行を修すと無間修とのなり○四曰無余修是
と無間修と相似て少異なり緒の雜行と捨念佛修行の外も余

の更無を無余修とすなり○皆決定と南无阿弥陀佛
と中て往生とるごとく思内小るなり也と念佛と小名利の爲小せ
む真実小唯往生極樂の爲とあり至誠心なり疑念あり往生
するごとく思取てハ深心なり仰頼救我と念とハ回向發願心
なり又念佛小始て皈依とより素懈怠なく称名するハ即ち長
時修なり佛前小向度小三礼九拜と佛足と頂くハ是恭敬修之
緒の雜行を回と心小念佛ハ無間修なり念佛と一助小頼て
余の行を爲さるハ無余修なり如是安心を定て南无阿弥陀佛
と称る内小三心中四修も悉く籠とて思内小るなりと云
仰られなり誠小難有御示しあれを克く味し

此外このほかに奥深おくふかき事ことと存ぞんせむ二尊にそんの憐あわれみなり
 本願ほんがんよりこそ候さうらなり

前の御教諭まへのおんきょうごの如く疑うたがひなく往生こうじやうすると思おもひよりて念佛ねんぶつをせむ
 三心さんしんも四修ししゆも其余そのほかの五念ごねん三種さんしゆ行儀ぎやうぎなどいづれの教戒けうけいも皆みな其内そのうちに
 筆ふでれた此外このほかに奥深おくふかき事ことと存ぞんせむ却かへて阿彌陀佛あみだぶつ教けう如來にがひよ二尊にそん
 の憐あわれみなり此外このほかに彌陀あみだの本願ほんがん小洩せうぬるなり御言おんごあり○本願ほんがんとハ
 弥陀佛あみだぶつの四十八願しじゅうはちがんをき別べつして第十八願じゅうはちがんの事ことを白まをしあり尋常じんじやう
 の疑念うたがひ深ふかき人ひとも如何いかん信心しんしんを凝こせむとて唯ただ六字ろくじの名号なごうを稱なづけハ
 極樂ごくらく往生こうじやうすると八余はちより心易しんやす過かる更さらなり外ほかに何なにも奥深おくふかき事こと

有ありといふは徒たも有あり又また一投いちとう起おこす積つりかんの下根げこん无む智ちの老らう父ふ老らう婆は女にょ
 女にょ小兒せうじ示しを為なすの方便ふはんなり此外このほかに奥深おくふかき事ことと存ぞんせむ其
 ち文ぶん古こ目めなる者ものハ解とぬゆ詳しやうと此外このほかに奥深おくふかき事ことと存ぞんせむ其
 ち云いふ俗ぞくを迷まよはす邪じや儀ぎと云いふ僧そう上人じやうじん御ご在世ざいせの時ときさへあや
 しくも増まして我わが没ぼつ後ごハさこそ百般ひやくぱんの邪じや説せつを言いふ者もの有あり
 こそ此外このほかに奥深おくふかき事ことと存ぞんせむ其
 ち云いふ俗ぞくを迷まよはす邪じや儀ぎと云いふ僧そう上人じやうじん御ご在世ざいせの時ときさへあや
 しくも増まして我わが没ぼつ後ごハさこそ百般ひやくぱんの邪じや説せつを言いふ者もの有あり

念佛ねんぶつを信しんぜんくもるゝハ代だいの法ぽうと
 ともなりし学がくの事ことなり

念佛ねんぶつ四種よしゆあり○一いち稱名念佛しやうめいねんぶつ是こゝに淨土じやうど小崇せうしゆ古稱こしやう念佛ねんぶつ

○二小觀像念佛是阿彌陀如來の像に向ひ心散散す唱る
念佛なり ○三小觀相念佛是阿彌陀佛の白毫相あり佛足
の千輻輪の相ありと心中小觀して念佛なり ○四小實相念佛
是阿彌陀佛の法性身を觀して唱る念佛なり 如是四種乃念佛
ありといふも 茲に舉ぐ小第一の稱名念佛して自余の念佛いひある
觀念の念佛おれを取まざるなり ○たゞ假令と書俗に後初の中
とらふ當れ也 ○一代の法と云釈迦如來脚一代の統より所の教法にて
首華嚴經より尾法華經の約五十年の間小統より一法を以
所謂一切經の更けて末世下根の徒俗人を素り僧といふも盡く見
たる人を希なり 後令たゞ有るも更知自せむと次の文へなり 言

○一代と云一生といふ如一字書小代ハ世也又更也とあり故ハ一世といふ
一代の更なり 又代人代判なり其本人の代なり其本人の判の代に判
するより物の價を代物といふ其物の代の金銀といふ義なり ○能
くハ能ハ尅也とあり俗小見事といふ當たり故ハ狂言所作何更
小ハ見更なりと續る能くハ能くといふ是なり 易ハ眇能視是能
行とあり眇ハ一眼の更なり一眼ハ物の視めたる者なりと其て見
更物と見分 辟足ハ跛躄の更なり歩れむふい者ありとも見更路と
行といふ更也 能といふ字を用ひたり為更と為るる能不能といふ由
能為ぬといふ義なり され能く學すともハ中一釈迦一代の經文を
學び者ハ希なり 見更一切經と學び更よく美し言ふ當れり

一文不知の愚鈍は身にわくく尼入道の毒
智は中もぐくはゆりしる

一文不知と書物の端を不知をり愚かろう鈍はまうと訓字にて至て
智の元者と愚鈍者とりまをり人天性の智ありとも書物と学ばれそ
天然の智開く更なり。学問せざる智の有、聖人のみで。其餘の不学にて
賢れは皆世智賢にて真の智おあはれ世の学者小悪更を為者も終
有む其徒をえり。学問は為る能く更あを却て悪更を巧む其たうと
の小人あれども大なる僻言にて喻む人參る良業あれども元病の人は是と服を
勿心止焦をへり。人參る大毒なりと忌怖るか加く。笑大毒の更なり。忠孝五

常の道も学問せざるを知らず。先祖上人も学問せざるを惡た更くと仰す
るふわくは学問せざるも真の先へ出と學者振ふる脚示し。わだ
○尼入道の無智の徒はけうとと、尼の女の僧入道、男の僧小く佛
の道入ると義小依入道とあり。又出家と、在俗の家と出佛の道小
入ると義とて出家と云なり。尤尼入道も經文を學び戒律を持
名利を離と衆生を濟度する身あれ。一文不知と云言ふるれども、茲
の尼入道とあるは良人小此後と年老れ。佛門小皈依と髪を剃り
法名と授り。男は老年小及び世の交りも墓々々出来ざれば家業
子孫小譲り。禪門と成り。輩とさくむひあり。此輩は世帯産業
小暇ある身あれ。書と学際もなく。文亡目一遍あり。經文の端

智者乃振舞ふるまひ代たせば以もと唯一向いっけん会あ佛ぶつと下

をのこ非まあらぬを以もて一文不知の愚鈍の身又も無智の輩とハ
 曰いひまかり。是還愚智の意いを和あらけて述つべいかり。還愚癡
 とハ元祖大師の法は法ほの聖道門之意い極ち智慧ち離り生死し浄じ土ど門
 之意い還く愚ふ癡ち生せい極ごく樂らくとあり。聖道門とハ大乘小乗の法と
 以も聖道門の修行しゆぎやうの諸しよの惑まどを捨す煩悩ぼんごうを破やぶ断たん。智慧ちを極ま
 自力じりきを以もて生死しじの苦海くかいを離りるかり。浄土門じやうどハ。知ち智ちありの智ち乃の
 無なも賢けんも愚ぐなるも平等びやうどう小極樂せうごくらく往生じやうせいさせんとの宗法しゆぼうありが
 仮令かじやう学がく才さい有ある物ものの理り非ひ善惡ぜんあくと并る身みありのも愚ぐ小還せうくわん代たせば以もと



尼佛にぶつ
 後生ごせい
 頼たのみ

田向たかむけ
 文ぶん

三十一

ふるまひの行跡と書。人々て智慧学をあれを至る賢者あらず
普通の人の学問せしを鼻つけ。仮初の事。漢語を以て言稍もすれ
か他人を直下し。彼俗客のやの愚物のと陰口。自然小誘る
心生じて智者の行跡を。人小忌憎する。人小聖賢の路
と悪く。當ぬ。更引當却て人小嗤る。人も有る。学問にけいする
人ある。時立全する。人か煙州盆の新渡の火入の中。吸殻と。た煙管にて
縁と。赤大赤面。種々純言と。帰リ。後小。主翁。冷笑。誠
其愚小。及。びと言れ。ど氣の毒。此格得て。有。更。た。学
問。身。小。す。更。た。れ。根。小。只。出。て。学。者。め。す。右。等。乃。生
物。織。且。お。ぼ。て。倭。令。博。学。多。才。の。人。か。り。念。佛。門。小。入。身。小。知。者。の

行跡と書。人々て智慧学をあれを至る賢者あらず
普通の人の学問せしを鼻つけ。仮初の事。漢語を以て言稍もすれ
か他人を直下し。彼俗客のやの愚物のと陰口。自然小誘る
心生じて智者の行跡を。人小忌憎する。人小聖賢の路
と悪く。當ぬ。更引當却て人小嗤る。人も有る。学問にけいする
人ある。時立全する。人か煙州盆の新渡の火入の中。吸殻と。た煙管にて
縁と。赤大赤面。種々純言と。帰リ。後小。主翁。冷笑。誠
其愚小。及。びと言れ。ど氣の毒。此格得て。有。更。た。学
問。身。小。す。更。た。れ。根。小。只。出。て。学。者。め。す。右。等。乃。生
物。織。且。お。ぼ。て。倭。令。博。学。多。才。の。人。か。り。念。佛。門。小。入。身。小。知。者。の

為誓以兩手印

是より御奥書なり。為證以兩手印と云ふは、印を打つるなり。との義小く、本朝上古の風俗、大事の證文、兩手小墨を塗て、證文の奥、我名の下、小押り。是と押手といふ花押の根本あり。神代より此事あり。唐土より印章といふ物渡しあり。印判を用る事、ふたれり。今、金銀の取遣の二札を、手形といふも、手の形より出、名なり。

浄土宗の安公起行此一紙小至極、源室が取存此外小令別義存甚と滅後

邪義を防んが為小取存を記一紙

建曆二年正月二十三日

源室判

石の一草の總結の御文、草なり。則、小述がごとく。上人御在世の時、念佛の教を種々言妨る輩、依て上人深く歎く。せよ、我が後、小猶更邪義と言觸を、徒まぐる輩、と思召、彼化女の望、僥倖、小此一枚起、籍を、書遺し、念、念佛信心の人の疑いを、暗させ、邪義と言觸して、信者と感す、背後と未代、を、此言、め、あ、たり。

○浄土宗の聖道門の天台真言法相三論佛心以下の諸宗、小對、する、宗、名、たる、傳、小、曰、從、允、至、聖、名、為、聖、道、從、穢、至、淨。

曰浄土此語小よるとは聖道門乃緒宗此世小於て釈迦如来
 の教法を學ぶ究修行の功成積て凡夫より聖僧小至りて果と
 得るは浄土宗を凡聖賢愚を擇むを僧俗男女を論ぜ
 す。攝土とて万更小就て攝する此世娑婆世界と厭ひ捨て專ら
 阿彌陀佛の浄土へ至ん更と求る故小浄土宗といふことあり。浄
 土とハ浄た土と刻る。則ち極樂世界の更なり。○宗ハ尊也至
 也要也と経して其門小宗所を以て名目と立ると何宗とい
 了。所謂天台宗真言宗おとい類之。又宗旨といハ天台小旨とす
 所を宗おといハ法相小旨とする所を宗といハ義おといハ宗旨とい
 たり。○安心とハ安心定とも刻て心定安んずるといハ義なり



決定といふなり。○起行といハ行
 ひ起といふより更小て念佛の行と
 起をい起ハ仕始といハ意を起
 を智者の行跡をせむと唯向
 小念佛とヤが即ち起行なり
 ○滅後の邪義を防ん為と我
 死しての後浄土宗小如是といハ
 真深た更有おも邪なる義を
 言觸し折角定と安心を在す
 輩の其邪を防ぐと小此一枚起

結を遺す御好なり防と八寄付なう小すことあり
 ○所存と八思ふ所とりふは○記とい書とりふ更畢ハ終とは
 一更不て物のまも果と成畢とふ文章の書終とい義なり
 其小雅有御教示て浄土宗の肝心鑑文とハ此一教起結の
 更もあれ浄土宗の人ハ朝々看經の後亦て頂た編一え祖上
 人の浅うぬ御高恩報謝する息を称名念佛しもうま
 念れ也宛と

浄土宗面向文和訓圖會卷之下大尾

本宗
 大谷文庫

阿弥陀經繪抄

好華堂主人著
 松川半山圖画
 全二冊

同 和訓圖會

阿弥陀經ハ功德廣大なるを著く世人の知る事ハ多し其も
 一々意味深長く一々容易小なり一々一書と經久と互成右左はし
 句一々に和漢を加ハ和漢の故事とあ一々一々悉く繪墨を以てまて
 得ん事多しとる小面の、自他、佛道信心の導しあるべき事也

般若心經繪抄

好華堂主人著
 松川半山圖画
 全一冊

同 和訓圖會

般若心經ハ真讀訓後兩点とも平仮名身中し且一字一句一
 委く讀解し悉く繪墨を加一々一々多し其の心經ハ大般若經六
 百卷の中より肝要の文と抜萃せ一妙極して讀誦は人々誦と
 經とてハ心經の力の大なることと云ふやけきと物一々に此の書也

觀音經早讀繪抄

全一冊

同 訓讀圖會

好華堂主人著
松川半山圖画

全三冊

世に後多経の註書多し其の解を以て或は其圖の如く載せ
て後小煩く其の如く載せたり其の如く載せたり其の如く載せたり
やうに其の如く載せたり其の如く載せたり其の如く載せたり
二二二二二の如く載せたり其の如く載せたり其の如く載せたり

浄土宗回向文繪抄

好華堂主人著
松川半山圖画

全三冊

浄土宗朝の功の面より其の功の如く載せたり其の如く載せたり
拜の如く載せたり其の如く載せたり其の如く載せたり其の如く載せたり
とかく解しやいやくし元祖上人一投起請りて浄土宗必用の如く

三都の中より其の如く載せたり其の如く載せたり
板元 秋田屋太右衛門
大阪心齋橋通安堂寺町

三都

江戸日本橋通二丁目

須原屋茂兵衛

同 日本橋通二丁目

山城屋佐兵衛

同 芝神明前

岡田屋嘉七

同

和泉屋吉兵衛

同 浅草茅町二丁目

須原屋伊八

同 横山町三丁目

和泉屋金右衛門

京都寺町通松原下町

勝村治右衛門

尾州名占屋本町七丁目

小樂屋東四郎

大阪心齋橋通安堂寺町

秋田屋太右衛門

問屋

書物

